

---

# Fate/kind king

マテバオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/kind king

### 【ノード】

N4895C

### 【作者名】

マテバオ

### 【あらすじ】

正義の味方を目指す 衛富士郎は、聖杯戦争で優しい王様  
ガッショ・ベルと出会い。

## Prologue (前書き)

この作品は金色のガッシュとFate/stay nightクロス物です。

土蔵に差し込む光が、俺の意識を覚醒させる。

「ん…朝、か…起きないと、な」

いつものように朝食の準備を開始するため、固い床から身を起こすつて、

「…また土蔵で寝ちゃったのか…？」

そう、此処は半ば雑多な物置と化している、屋敷の一角にある土蔵。

此処で鍛錬するのが、俺の日課となっている…訳だが…。

「…そのまま眠っこけたって事か

またやってしまった…いや、それより片付けが先だ。なにせ、昨日はストーブを少しげじってたからな…。

そう考えながら、俺は工具等を片付ける

が、本来なら無いはずの物を前に、行動を一時中止。それを拾い上げる。

「…なんだこれ？」

それは、プリツツの箱に割り箸を四本突き刺した、まるでロボットのような物だった。

当然、俺にはこんな物を作った覚えは無い…と直つよつ、こんな

雑な物は作らない。  
とすると……。

「……藤ねえの奴、また勝手に入り込んだな……」

ため息をつきながら、これの対処に思考を費やす。  
「あの虎の物を、丁重に扱う必要は無いか」

仕舞う場所もあまり無いし、それから桜が起らじに来るだらつ  
な……よし、決定。放つておけ。

そう考えて、俺は土蔵のシーツの上にそれを置く。

それが、アソツを呼ぶ触媒だとば、この時は知るよしも無かつ  
た

ソシテ歯車ハ動キ出ス

## 優しい王様、召喚

俺は、また殺されるのか……！？

「筋は良いが……若すぎたか……まあ、魔術師に斬り合いを望むべくもないが……」

「こいつと赤い奴の殺し合いに居合わせたから、殺されるのか……！？」

「もしかするとお前が7人目だったのかもな……どうしてもこれで終わりなわけだが……」

もう、これで終わりなのか……？

「じゃあな、坊主。今度は迷うなよ……！」

俺の眼前に、紅い槍が迫る。

ぬ？ シヌ？ しぬ？ 死ぬ？

俺は、ここで死ぬのか？

前回の焼き直しのような動きが、スローモーションに見えてくる。

「冗談じゃないつ！

俺は、まだ誰ひとり救えていない……！

俺はまだ正義の味方になれていない……！

左手が、熱を持ったように疼く。

オ レ

衛宮 士郎は、まだ死ぬわけにはいかない……！

最後まで抗うと決めたその時、激しい光が辺りを覆つた。

「な……何!? まさか、7人目の中アントだとい……?」

青い奴が、急な出来事に驚いて動きを止める。

刹那。

「がつ……! ?」

電撃が奴を、土蔵の外にまで押し返した　!!

俺は、あまりの展開の早さについていけず、ただ目の前に立つているソイツを見ていた。

金色の髪を持ち、黒い外套を身につけ、  
子供らしく、それでいて強い眼差しをこちらに向かって

「　問おひ」

声変わりする前の、若干高い声色でソイツは言い放った。

「お主が、私のマスターか」

「え…マ、マスター…？ 一体、何の事だよ…？」

何を言つてゐるのか、コイツが何者なのかも俺には理解出来ない。

するとソイツは、

「ヌ…しかし、左手に令呪があるではないか？」

そう言つて、俺の左手の甲にある模様を見せ付けるようにする。

…あれ？…こんなのは、さつきまで無かつた筈なんだけどな…？

未だによく判つてない自分に、ソイツは改めて俺の前に居直し、「…サーヴァント・パートナー、召喚に応じ参上したのだ。

これより私の心はお主と共にあり、私の雷はお主の道を切り開く。

「ここに、契約は完了したのだ」

やつぱりよく判らない、何かの前口上の言葉を発した。

俺が対応に困つていると、ソイツは：

「先程の者が、まだ表にいるみたいだの…スマヌ、私は行つてくるのだマスター！」

そう言つて、土蔵の外へと飛び出でていった…って、オイ…？

「アイツ、何を考えて…っ…！」

仮にもアイツは子供だ、あの青い奴に敵う訳がない…！…

俺はアイツの後を追つたために土蔵から出て…その考えの甘さに気付いた。

青い奴　　どうやら、つつきの電撃はあまり効いていなかつたら  
しい　　とアイツが、縛縛した空氣を纏いながら対峙していたのだから。

「…一応聞くがよ、小僧。この勝負、次に預けるつもりはねえか？悪い話じやないだろ？…そら、あそこで惚けているオマエのマスターは使い物にならんし、オレのマスターは姿をさらせねえ大脇抜けときた。

「これはお互い、万全の状態になるまで勝負を持ち越した方が好みいんだが」

そんな事をのたまつた。

が、それは青い男にとっては本当に『一応』の話のつもりだったのだろう。いつでも戦えるように出来る、その槍の構え方が何よりの証拠だった。

だからこそ

ソイツが何かを考え込むように俯き、そして

「 ウヌ、それもそうだの」

などと、その話を了承した時、誰もが固まるのは至極当然の事だった。

「 え、おい？」

もう、訳が判らない。

少なくとも、今の言葉はこの場で言つものじやないだろ？ほら、青い奴だって啞然としてるじやないか。

「…あ～、小僧、その言葉は本気か？」

あげくの果てには、聞き直してゐるじやないか…。

「ヌ?

」の場で「冗談など言ひ訳がなかひつへ..」

いや、まあ、確かにこの場で「冗談なんて言えたら凄いけどな? いや、まあ、確かにこの場で「冗談など言ひ訳がなかひつへ..」

「それに私がお主の前に出向いたのは、戦うためではなく 扱うためだからの」

「…チツ、闘う気が無いなら此処に居る意味はねえな… いまいち納得がいかんがな」

結局、さう言つて青い奴は渋々と立ち去つていった。

「これで、ひとまず安全か…。  
さて、残る問題は…。」

「ヌ?..どひじたのだ、マスター?..」

今、俺の目の前にいるロイツだ。

「だから、そのマスターとか、サーヴァントって何だよ?..」

そう言つと、ソイツは目を丸くした。

「俺、変な事言つてないよな?..」

「マスターは、聖杯戦争を知らぬのか…?..」

「何だよ、その聖杯戦争つて……とか、マスターつて呼ぶのはやめてくれないか？」

俺には、衛宮士郎つて名前があるんだからな」

「ウヌ、では士郎と呼ばせておらうのだ。  
私はガツシユ・ベル、よろしく頼むのだ」

「ああ、それで聖杯戦争つて一体」

俺がソイツ ガツシユに投げ掛けようとした疑問は、此処で遮られる。

「あら、衛宮くんは何も知らないのかしら？」

此処に留める筈が無い、第三者のそんな言葉で。

「

無論で、俺をうように、俺の前に立ち塞がるガツシユ。チラチラとこちらを見る感じからして、指示を待つてしているのだ

う。

だけど、俺はそんな事には気が回らない。

だつて、壙の上に立つてるのは、その、間違いなく

「お、おまえ遠坂……！？」

「ええ。こんばんは、衛宮くん」

いつも、と極上の笑みで返してくる遠坂凛。

「あ う？」

それは、参った。

そんな何気なく挨拶されたら、わざまでの異常な出来事が嘘みたいな気がして、何が何やら分からなくなる

待てよ？

「なんで、遠坂が此処に居るんだ？」

そうだ、何故今さっきまで人外の戦闘が起つていた此処に、都合良く現れるんだ？

「…決まってるでしょう？」

その疑問が意味成す事、それは

「私が貴方と同じ、サーヴァントを従えた魔術師だからよ」

あの青い男と同じ、敵であるかもしれないといつ可能性。

いつ戦闘が起こるか分からぬ、そんな状況で、つい自分とガッシュの位置関係を気にしてしまう。

「あ、身構えなくてもいいわよ？」

私はただ、自分の立場が判つてない衛宮くんに色々と教えるつもりなだけだから

「 は？」

「だから、教えてあげるって言つてるのよ。

今その子、多分貴方のサーヴァントなんでしょうナビ　との会話からして、何も判つてなさそつだからね「

…えつと、俺はどうすればいいんだ？

その答えを得るために、ガッシュに配せをする。

「……ウヌ、戦わなくていいのなら、そうした方が良いのだ

どうやら、俺と意見が一致したらしい。

そうしたら、此処で言つべき言葉は一つだ。

「　それじゃあ、外は寒いから一旦中に入ろう。  
説明はそれからだ」

そう言って、俺とガッシュは先に中に入る。

自分に向けられる、憎悪の塊を気に留めながら

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4895c/>

---

Fate/Kind King

2010年12月30日20時47分発行